

コラム 西洋古代史の泉 5

マインツ——ライン河岸のローマ都市

南 川 高 志

ドイツを訪れるとき、私は到着日の宿を、直行便の到着するフランクフルト・アム・マインではなく、近郊のマインツ市にとることにしている。マインツへは、フランクフルト国際空港から西へ普通電車（Sバーン）を使い30分弱で着くことができるし、この町の方が、ホテル代が高く治安の面でも不安のあるフランクフルト市内よりもずっと快適とを感じるからだ。

マインツは現在人口20万人ほどの都市で、ラインラント・ファルツ州の州都である。ライン川とマイン川の合流点近くに位置し、日本では、ベルリンやミュンヘン、フランクフルトのように知られていない。せいぜいライン下りの観光船の始発乗り場として知られるくらいだろうか。

しかし、マインツ市は、中世に司教座が置かれ、8世紀の終わりには大司教座都市となって、ドイツ地域に広く影響力を持った。さらに、13世紀に自由都市になり、ライン都市同盟の指導者として繁栄した。11世紀初めに完成した巨大な大聖堂（975年起工）が現在もそびえている。また、活版印刷術の実用化に成功したヨハネス・グーテンベルク（1394/99年～1468年）がこの町の生まれで、大聖堂のほど近くの広場にその像が立ち、博物館もある。ただ、こうした中世以降のマインツに関心のある方には中世史、近代史の専門家の書かれたものをご覧いただくとして、ここでは古代のマインツを紹介してみたい。

都市マインツの歴史は、紀元前18年から13年にかけての間に、ローマ皇帝アウグストゥスの命を受けてゲルマニアに侵攻したドルルスが、ライン河岸に設置した軍事拠点に始まる。「ケルト系」とされる神モゴンにちなんで、この拠点はモグンティアと呼ばれた。2軍団が駐屯するこの地には、やがて兵士だけでなく民間人も集まり、次第に都市へと成長していった。モグンティアクム（Mogontiacum）と呼ばれるようになったこの都市は、紀元後1世紀末のライン川周辺地域の軍管区から属州への統治方法変更にともない、属州上部ゲルマニアの州都となった。その後、ローマ都市として繁栄すると同時に、幾度かの政治的事件の舞台ともなった。

現在のマインツには、トリーアに見られるような規模の大きな遺跡、あるいはトリーアの州立博物館やケルンのローマ＝ゲルマン博物館に展示されている優美なモザイク画などはないが、興味深い遺跡や遺物が数多く残されている。その主だったものを見ていこう。

一般に最もよく知られているのは、古代船の博物館であろう。この博物館は、大

聖堂のある旧市街の中心部からは、南東の方角に向かって少し歩かねばならない。鉄道のマインツ中央駅から一駅分、かつては「マインツ南駅」とっていた駅のすぐ近くだから、私は旧市街から歩いたが、鉄道を利用した方がよいかもしれない。モゴンティアクムはライン川沿いの町であったため、当然ローマ時代には多くの船が往来した。その船の残骸が、1981年から翌年にかけて、地下7.5メートルの地層から多数見つかった。新しく設けられた博物館には、出土したローマ時代の船と、実物の10分の1の大きさに再現した古代船の模型が展示されていて、10分の1とはいえ、リアルに大きさが実感される。

ところで、先ほど、この博物館の近くの駅はかつて「マインツ南駅」と書いてしたのは、現在は名前が変わっているからである。駅のすぐそばにローマ時代の劇場が発掘されており、駅の現在の名前は「マインツ・ローマ劇場」となっている（写真1）。発見は20世紀のはじめであるが、1000人を収容できる、幅116メートルの大きさは、アルプスから北では最大と地元の案内パンフレットでは紹介されている。もっとも、イギリスのカンタベリ市などにあったとされるものより大きい
かどうか、私は疑問に思う。この劇場は、陣営の南の出口に近いところに建てられていた。



写真1



写真2

この劇場跡のちかくに、「ドルススの石塔」と呼ばれる構造物が残る（写真2）。死者の供養のための建造物と思われる。ドルススは、先に述べたローマの将軍の名前であり、ゲルマニア遠征の途中の前9年に落馬して死んだこの英雄を悼んで、後9年以降に軍団兵たちが捧げた記念碑と長らく考えられてきているが、建物の形態から2世紀のハドリアヌス帝時代の高貴な人物の墓という考古学者の意見もあって、確実なことはいえないようである。

さて、ローマ人は、現在マインツ中心街から

東に向けてライン川に架かるテオドル・ホイス橋(写真3)の位置に、紀元後27年に初めて橋を架けた。この橋を渡る手前、州議会堂の向かいの広場 Deutschhausplatz に、ユピテル神などを描いた石柱が立っている(写真4)。本物は州立博物館(Landesmuseum Mainz)にあり、現在立っている柱はレプリカであるが、手の込んだ彫刻の施された優美な石柱を、実際の立地状態で、その大きさを知ることができる。この石柱は、ネロの治世に、この町の商人と手工業者によって「皇帝の安寧のために」建てられたことがわかっている。1905年に2000個以上のバラバラの石片とし



写真3



写真4

て発見されたものを、復元したそうである。

ユピテル石柱の近く、聖ペーター教会の道を挟んだ西側に、やはりレプリカの門が見られる(写真5)。「ダティウィウス・ウィクトルの門」と呼ばれるもので、本物はやはり州立博物館が所蔵し、このレプリカは1962年にできた。高さ6.5mあるこの門は、その碑文から、3世紀に、マインツ近郊のタウヌス人の共同体(ローマ時代のニダNida, 現在のFrankfurt-Heddernheim)の参事会員で、モゴンティアクムの皇帝礼拝担

当者でもあつたダティウィ

ウス・ウィクトルが建てることを約束し、その息子たちが約束を成就したものであるとわかる。

旧市街からテオドル・ホイス橋を渡ったところに城塞があり、現在博物館になっている。この城塞の起源は、ローマ人が築いた陣営にある。この博物館にも、わずかだがローマ時代の遺物が展示されている。この陣営は、ローマ人の国境観念を知る上で重要である。しばしばライン川それ自体がローマ帝国と外部世界を分



写真5

ける「国境線」と思われがちだが、ローマ人は実際にはライン川を軍事的な境界線とはせず、彼岸にも拠点を設け、内外のコミュニケーションをはかっていたのである。

以上の他、旧市街の各所に床下暖房給湯の遺稿などがあり、東方の神々、イシスとマグナ・マテルの聖所も、ショッピングセンター建設の工事の際に発見された。遺跡も重要であるが、州立博物館とローマ・ゲルマン博物館（Römisch-Germanisches Zentralmuseum）の二博物館を見学することを勧めたい。前者は、マインツとその近郊からの出土物、特に碑文を数多く所蔵していて、ローマ史研究者には興味が尽きない。軍隊や兵士関係の碑文が多いが、民間人の生活に関わる碑文もある。そこで売られている碑文のカatalog *Römische Steindenkmäler: Mainz in römischer Zeit*, Verlag Philipp von Zabern, 1988 は、今や少し古くなった観はあるものの、簡便で写真も多く、当地のラテン語碑文を概観したい日本人研究者には利用しやすいだろう。後者の博物館は、レプリカを多用しながら、古代世界の歴史を広く参観者に理解させるものとなっており、ローマ時代の日常生活用品もたくさん展示されている。天球儀やゲーム盤、水オルガンなどの模型の展示は目を引くだろう。

私がマインツにとくに関心を持つのは、ライン河岸のこの都市とその周辺地域がヴァンダル族、スエウィ族、アラニ族の襲来によって破壊された 406～407 年という時期を、ローマ帝国崩壊の時と解釈しているからである。ただ、このことは、また別のところで論じることにしたい。

なお、マインツ市には、1476 年創設のマインツ大学（現在の正式名称はヨハネス・ゲーテンベルク大学）がある。私の古代史の師であった藤縄謙三教授は、1977 年度の 1 年間をこの大学で研究された。同大学のヴァルター・マルク教授が収集したヘロドトス関係図書を読んで過ごされたそうで、教授の大著『歴史の父ヘロドトス』（新潮社、1989 年）にはマインツでの研究成果が盛り込まれている。私が学生時代以来学恩をいただいた西洋古典学の岡道男教授も、若き日の留学時、チュービンゲン大学とともに、このマインツ大学でヴァルター・マルク教授に学ばれた。岡教授は、京都大学教授在職中、マインツ大学で客員教授として講義されたこともあった。松平千秋教授や松本仁助教授もマインツ大学で講義されている（松本教授のマインツ大学留学時代の思い出の記が、最近一新し充実した日本西洋古典学会のホームページに掲載されている）。西洋古代史研究者については知らないが、西洋古典文学専攻の方には他にも、このマインツで学ばれた方がおられるのではと思う。日本の西洋古典学界には、マインツの町の気風が込められているのかもしれない。